

ヨーガーストラの身体観

番 場 裕 之

ヨーガーストラの身体観

番 場 裕 之

はじめに

Yogasūtra では心作用の止滅¹に始まり、全章を通じて心作用や内面的精神世界について多くを述べている。そこでは、禪定や三昧等心の状態や弁別智 vivekakhya²が発現するまでの真我 puruṣa と自性 prakṛti の混沌とした状態や心の乱れた状態 vyuttitacitta など乗り越える手段が説かれているのである。

また、八支 yogāṅga 等の実践階梯では、苦行 tapas や坐法 āsana、調気法 prāṇāyāma 等の身体的行法についても述べている。それでは、Yogasūtra よる古典ヨーガ体系では、身心両面のうち特に身体についてどのような把握がなされていたのであろうか。この問題の解明は、Yogasūtra の思想体系、実践体系を理解する上で極めて重要な意味を持っている。なぜなら、ヨーガ実践者が八支の階梯を進んでゆくためには、坐法と調気法等の実践作法が身体を媒介として行われることが必要であり、それらはヨーガ行法のなかでも重要な位置を占めているからである。

しかし、この身体論を考察する場合、単に「身体」といっても、「精神」と「肉体」というような単純なものではなく、「身体」を「可視的な肉体としての身体」と「不可視な身体」と、少なくとも二元的以上に考える必要があるように思われる。なぜなら、ハタ・ヨーガになれば、苦の対象となる身体から身体の神聖化をはかるための具体的な作法が盛り込まれ、「微細な身体」³を説くこととなる。そして、身体と心は決して分離した別個の個体ではなく、身体の堅固がなければ実践行の展開があり得ないという原則的な解釈⁴があり、重要な行法に何らかの形で身体が関係しているからである。身体的実践作法を説く Yogasūtra にもそうした思想の萌芽が既に見受けられるのだろうか。

本稿では、ハタ・ヨーガ的、タントラの身体論については積極的には触れないでおくこととし、古典ヨーガ体系におけるその隠された身体の捉え方について、Yogasūtra とその註釈書から解明してゆくこととする。後世、タントリズムとしての積極的な身体に対する接し方、特に実践行が生まれてゆく背景として、古典ヨーガ行法による身体の把握に何らかの秘密が隠されているのではないかと思われる。

第一章 肉体的身体へのアプローチ

肉体的な身体にダイナミックに接してゆくハタ・ヨーガとは異なり、心作用の止滅を大きく掲げた古典ヨーガ体系における身体への関わりを見る場合、特に実践作法の上で、どれほど積極的に肉体的身体を捉えているかは極めて重要な問題である。

実践作法による直接的な肉体的身体との対峙について検討するとき、特に重要なのがその行法体系としての八支である。なぜなら、八支は重要な行法をすべて含んでおり、身体的行法の果たす役割を説いているからである。

yogaṅga-anuṣṭhānād aśuddhi-kṣaye jñāna-dīptir ā viveka-khyāteḥ // YS2-28

ヨーガの八支を実践すれば、不浄なるものは減少し、弁別智（が起こる）までに輝かしい智恵が起こる。

これは八支を説く最初の部分であるが、この場合の弁別智とは真我独存 *kaivalya* を引き起こす直接的な要因であり、解脱への重要な手段を意味している。また、八支は身体と心との総合的な実践体系である。即ち、禁戒 *yama*、勸戒 *niyama* の二種類の戒行によって、内外の環境を調える。そして坐法、調気法といった具体的な身体との対峙へと入ってゆく。八支でも前五支は外的な行法⁵であると言われるが、肉体的身体に関する実践作法が内的実践の基礎を築いていることも否めない事実である⁶。その点で、これらの身体的行法は本当に外的なだけなのであろうか。

ところで、*Yogasūtra* では、肉体的身体に触れる箇所はきわめて少ない。その中で、身体をどのようなものと捉えていたかということを知るのに興味深い一偈がある。

śaucāt svāṅga-jugupsā parair asaṃsargaḥ // YS2-40

清浄行によって、自己の身体に対して嫌悪を感じ、他人に触れなくなる。

ここでは、ヨーガ行者に肉体的身体の汚れを覚らせるという、前半部分が重要と思われる。即ち、行法の主体・媒体となる肉体的身体は苦の原因だということである。もっとも、これは実践して初めて自覚できる想念であり、実践前の身体に対して定義されるものではない。そして、この清浄行を行った時点では、その実践前よりも数段と肉体的身体の浄化が行われ、身体への意識が強まったことを同時に意味している。その状態では、他人の身体に触れなくなるが如く、自己の身体に対する不浄感が強くなるということである。

ところで、清浄の戒行は外清浄 *bāhya* (śauca) と内清浄 *ābhyaṅgā* (śauca) に区分され、外清浄が土や水によってあるいは供物を食することによって身体を清めることであり、内清浄は心を清めることであるという⁷。内的な心を清める手段については触れていないが、外清浄、すなわち肉体的身体的な作法については幾分具体性があり、肉体的身体に関する事象は、行法的にも理論的にも把握しやすいものである。従って、肉体的身体に関する実践作法は、面授口伝する上において、行法を基礎づけるためにきわめて重要な役割を持っていたこ

とは容易に想像できるものである。

換言すれば、肉体的身体による実践作法は外的であると同時に、実践体系の第一段階から解脱に至るまで終始、身体との対峙は継続するものである。それ故に、身体の「汚れ→浄化→内化・深化→微細化・神聖化」というプロセスが重要となってくるのである。

さて、実際に八支を見てゆくと、禁戒においては道義的指針が説かれるが、勸戒になると実際の肉体的身体に関する作法が説かれるようになる。先に示した清浄行もその一つである。それは又、註釈によると次のように説明される。

svāṅge jugupsāyāṃ śaucam ārabhamāṇaḥ kāyāvadyadarśī kāyānabhiṣvaṅgī
yatir bhavati / kiṃ ca parair asaṃsargaḥ kāyasvabhāvāvalokī svam api
kāyaṃ jihāsur mṛjālādibhirākṣālayann api kāyaśuddhim apaśyan katham
parakāyair atyantam evāprayataiḥ saṃsṛjyeta // YBh2-40

自己の身体に嫌悪を感じ清浄行を始める者は、身体の不完全を見て身体に執着しない修道者となる。更に他人と接触することなく、身体の本性を観て、自身の身体をも放棄しようとし、土や水などによって清浄にしようとしても、身体の清浄は観えない。どうして全く浄化されない他人の身体に触れることがあろうか。

勸戒はヨーガの実践過程における対自的な指針である。ここに示されているように、肉体的身体、特に何の浄化的作法も為されない現実的な身体については極めて嫌悪されている様子がうかがえる。これは、単に肉体的身体の外部的、表面的な不浄感を示しているだけではなくもっと根本的な潜在的要因も絡んでいる。即ち、肉体的身体を得てこの世に生存しているということは、現在輪廻の中に居るということの意味し、又、肉体的身体の構成自体が、prakṛti の転変と深い関わりがあり、真我独存とは対照的な状態であるからである。

一方で清浄の戒行は肉体的身体を悲観視するばかりではない。

sattvaśuddhi-saumanasya-ekāgrya-indriyajaya-ātmaadarśanayogyatvāni ca // YS2-41

(清浄の戒行によって、) サットヴァの清浄、歓喜、専心性、感官の克服、自己直観能力などが現れる。

清浄行も初歩の段階では自己の身体の不完全性のみが強調されて感受されるが、その嫌悪感を感じることが清浄行そのものなのである。そして行法が深まれば、その果報も不浄感の自覚から更に浄化され、精神化されていくのが分かる。この身体的な内化傾向はこの後の知足、苦行、読誦、自在神祈念と、順次その傾向が明確になってゆく。

また、坐法においても実践作法の中に肉体的身体の内化・深化傾向が見受けられる。これは、坐法が単に足組の仕方の肉体的体操の実践ではないことを意味している⁹。もっとも、「坐法は堅固で且つ心地好いものである。」⁹と定義されるが、そこには、「肉体的身体による形態的な安定」と同時に「合一 samāpannam cittam」といった坐法完成のための内的に深化した手段が段階的に説かれる¹⁰。こうしたことが坐法 of 精神性を強く表していると言える。

調気法の場合も肉体的身体の作法を伴うが、決して、呼吸の出し入れだけを説くものではなく、実践階梯において深遠なる奥行きを見せている¹¹。特に氣息と同時に把握される生氣 *prāṇa* の存在は単なる可視的な肉体的身体における呼吸法としての作法であると同時に不可視な微細身にも働きかける作法であることを想定させているのである。なぜならば、生氣（五氣 *pañcaprāṇa*）は、身体中を巡って様々に作用しているからである。これも単に肉体的身体という観念のみで把握しきれものではないのである。

以上のように考えると、可視的肉体的身体の実践作法自体に重要な意味があるのは当然であるが、それは常に不可視的身体の方向へ無限な拡がりや深化を示していることがわかる。

次章では、直接把握できない微細身についてヨーガの実践的立場から検討してみたい。

第二章 神通力 *siddhi* と微細な身体 *sūkṣma-śarīra* ～内面的身体へのアプローチ～

サーンキヤの身体論によると有情の身体には微細身 (*sūkṣma-śarīra*) と肉体的身体 (粗身 *sthūla-śarīra*) の二重の組織があるのだという。細身というのは、いわば、靈魂身で生死を貫いている微細な身体である。粗身は、生死によって得捨する肉体的身体である。その中で、微細身を組織するのは18要素とされる。それは、覚、我慢、十一根（五知根：眼・耳・鼻・舌・身、五作根：手・足・舌・生殖器・排池器、心根）、五唯（色・声・香・味・触）であり、覚、我慢、十一根の13要素は我のための心理器官となり、五唯は13器官を維持する物質的基礎となっている。また、苦の原因は真我が微細身にとらわれてそこに起こる出来事を真我自身のものと誤認するところにある。¹²

Yogasūtra ではここまで明確に身体について述べている箇所はないが、微細身は肉体的身体に対する身体で、それを作用させる身体である。輪廻する主体としての身体でもあり、これは直接知覚の対象ではないと註釈家はいう¹³。そして、バーシャ註では八支を述べる中で次のように記述している。

dhṛti kāraṇaṃ śarīram indriyāṇām / tāni ca tasya / mahābhūtāni śarīraṇām,
tāni ca parasparaṃ sarveṣāṃ tairyagyaunamānuṣadaivatāni ca paraspara-
-arthatvād ity evaṃ navaḥ kāraṇāni / YBh2-28

保持の原因とは身体が諸感官の〔保持の原因〕であり、そして、これら（諸感官）がこの（身体の保持の原因）である。諸粗大元素は諸身体の〔保持の原因〕であり、そして、これら（身体・感官・元素）は相互に〔原因〕である。また、動物・人間・神は総ての〔保持の原因〕である。〔なぜなら〕相互の目的となっているから。以上が9つの原因である。

この註釈自体は、サーンキヤの身体論と共通した概念にもとづいているといえるが、ヨーガの伝統では、後世ハタヨーガ的身体論が極限にまで発展してゆくことになるという歴史的背景があり、*Yogasūtra* の肉体的身体の作法が順次内化、深化してゆくということとは無関

係ではあり得ない。それ故、Yogasūtra の身体論は、哲学的思弁の領域ではサーンキヤに近いといえども、一方ではより実践的な身体論を主張するのは当然ではないかと考えられる。その点に関して以下で検討してゆくこととする。

肉体的身体を媒体とした行法の中で勤戒に含まれるものとして苦行 tapas がある。苦行はもちろん肉体的身体を条件づけてゆく実践作法であるが、決して過度な難行苦行を示すものではない。註釈書により若干異なるが、それは「極端な両極に耐えること」であり、制食を意味する行法が強調されている¹⁴。それと同時に、先に述べたように肉体的身体に対する実践作法も内化してゆく傾向も見受けられる。八支の実践階梯を経る過程で、苦行の作法も肉体的身体の内化、深化される仕組みがあると考えられる。

kāya-indriya-siddhir aśuddhi-kṣayāt tapasaḥ // YS2-43

苦行は不浄を破壊するので身体と感官の神通が生ず。

tadāvaraṇamal āpagamāt kāyasiddhir aṇi mādyā /

tathendri yasiddhir dūrāt-śravaṇadarśanādya-iti // YBh2-43

その時、障りとなる不浄が消滅するので [身体が] 微細になる等の身体的神通力が生ず。

同じように、遠くから聞いたり、見たりする等の感官的神通力が生ず。

ここでは苦行の果報として身体の微細化が取りあげられているが、これは微細身とどうい
う関係にあるのだろうか。神通力を説く箇所は、そのほとんどが神通経験者の立場から説か
れており、それを直接的に解釈するには多いに問題があるが、TV2-43では、身体的な神通を
説明して、「(神通力は) 微細になること、大きくなること、(身体を) 軽くすること、(望む
ものを) 獲得すること」(aṇimādyā mahimā laghimā prāptiś ca /) であるとしている。

この微細 aṇiman は、直接的に解すれば、物理的の微細化を意味しているようであり、肉体的
身体の内化という考え方とは多少次元を異にする。また、この神通は苦行を手段としてお
り、実践階梯でも高次なものとはいえない。その上、身体や感官に起こる異変を神通力とし
て捉えている段階では未だ心が発起した状態¹⁵であり、これが直接に解脱へ導くものでもな
い。それ故、肉体的身体との対時による身体の深化、内化、換言すれば、微細化とはここで
は直接的には結びつかないようである。

それとは反対に、綜制による神通ではより身体の内面化が見受けられる。

tato 'ṇima-ādi prādurbhāvaḥ kāya-saṃpat tad-dharma-anabhighātaś ca // YS3-45

その時、微細になるなどの (神通力) が発現し、また身体的美徳があり、その美徳は害
されることはない。

rūpa-lāvaṇya-bala- vajra-saṃhananatvāni kāya-saṃpat // YS3-46

身体的美徳とは、端麗、美麗、威力、金剛のような堅固さなどである。

これは、前の偶を受けた形で説かれているもので、五大やその原因である五唯等に対して
綜制を実践したときの果報として説かれる五大の克服が為されたときの説明である。

これは、前記のサーンキヤの身体論を思い出させてしまうが、註釈によると微細化は原子になること (tatṛāṇimā bhavaty aṇuḥ / YBh3-45) と説かれている。この微細化も言語的には先述のものとはほぼ同一のものと見て間違いなだろう。しかし、重要なのは、これを導き出した手段の違いである。YS2-43で説かれた微細化は、苦行を原因としていたのに対して、ここでは、八支の後三支、即ち綜制に原因している。また、五大の克服が説明されており、微細身との関係も深い。従って、YS3-45で説かれる微細化は、神通の解釈の仕方にもよるが、単純に「大・小」という尺度よりも、「粗・細」の尺度で捉えた、肉体的身体の深化、内化的なものとして理解できるのではないだろうか。即ち、神通を導く行法の種類やその深まりによって、肉体的身体から伝統的な「微細身」の領域へと実践作法の対象が移行しつつある証拠ではないだろうか。

同時に、不壊なる身体的美徳が説かれるが、これは清浄の戒行によって現れる不浄な肉体的身体への嫌悪感とは全く違った次元で説かれている。先に嫌悪された身体はヨーガの境位を経た結果、この段階ではもはや賞賛されているのである。これが正にヨーガにおける肉体的身体の深化であり、内化であり、実践的な微細化といえるだろう。

これ以外にも身体について触れている部分が幾つかあるが、それらは、神通との関係が極めて高い。もっとも、神通は最終目的ではないので、心も未だ乱れた状態ではあるが、綜制を原因とする神通には解脱へと行者を導く高次なものがあるのも事実である¹⁶。そしてここで媒体となる実践作法も後三支の内的なものであり、そこに身体の内化とは必然的に重要な関係が生じてくると考えられる。

ところで、綜制の対象として説かれる箇所では、身体の姿と説かれる場合と具体的な部位を示す場合があり、やはり神通を導く結果となっている。

kāya-rūpa-samyamāt tad-grāhya-śakti-stambhe cakṣuṣ-prakāśa-asamprayoge
'ntardhānam / YS3-21

身体の姿に対して綜制を為すことによって、その（身体）感受されるべき能力が停止し、眼の輝き（視線）と結合しなくなる時、（身体は）不可視となる。

pañcātmakaḥ kāyaḥ / sa ca rūpavat tayā cakṣuṣo bhavati / rūpeṇa hi kāyaś ca
tad rūpaṃ ca cakṣurgrahaṇakarmaśaktim anubhavati / tatra yadā rūpe
samyamaviseṣo yoginā kriyate tada rūpasya grāhyaśakti
rūpavat kāyapratyakṣatāhetuḥ stambhyate / --- TV3-21

身体は五元素から成る。そして、それ（身体）は形態を有するということによって眼に見えるようになる。なぜなら、形態によって、身体とその形態は眼の把握作用という能力を経験するからである。そこで、形態に対してヨーガ行者によって特別の緩制が為されると、形態を有する身体を直接知覚する原因である形態の感受される能力が停止される。

身体が五元素からなるというのは、先に示したサーンキヤの身体論と共通している。しかし、この身体はあくまでも微細身の構成である。つまり、微細身が、形態 (rūpavat—粗身—肉体的身体) と融合することで初めて、現実の眼の把握作用を受ける身体として成立するという意味である。

また、綜制を為して起こる神通力を身体の微細化の視点でみた場合、その対象として具体的な部位を挙げている。この例を以下にまとめて記すこととしよう。

nābhi cakle kāya-vyūha-jñānam // YS3-29

臍の輪に対して (綜制を為すことによって) 身体の組織を知る。

kaṅṭha-kūpe kṣut-pipāsā-nivṛttiḥ // YS3-30

喉のくぼみに対して (綜制を為すことによって) 飢えと渇きが消滅する。

kūrma-nāḍyāṃ sthairyam // YS3-31

亀の管に対して (綜制を為すことによって) 心の安定性が生ずる。

これらの部位に関する註釈はほとんどないが、パーシャ註では次のように説いている。

nābhi cakre saṃyamam kṛtvā kāyavyūham vijānīyāt / vātapittaśleṣmāṇas trayo

doṣaḥ // dhātavaḥ sapta tvaglohi tamāṃsasnāyavasthi majjāsukrāṇi / pūrvam

pūrvam eṣāṃ bāhyam ity eṣa vinyāsaḥ // YBh3-29

臍の輪に綜制を為すと、身体の組織を正確に知るだろう。風・胆汁・粘液が (身体の) 三気質である。[身体の] 七要素とは、皮膚・血液・肉・腱・骨・髓・精液等である。

jihvāyā adhasat tantus tantor adhasat kaṅṭhas tato 'dhasat kūpas tatra

saṃyamāt kṣutpipāse na bādhete // YBh3-30

舌の下方に糸がある。[その] 糸の下方に咽喉がある。その下に穴がある。そこに綜制を為すことによって飢えと渇きとに悩まされない。

kūpādadha urasi kūrmākārā nāḍī, tasyāṃ kṛtasamyamaḥ sthirapadam labhate /

yathā sarpo godhā veti // YBh3-31

穴の下の胸に、亀の姿をした脈管がある。それに綜制を為す者は堅固な地位を獲得する。

あたかも、蛇やとかげの如し。

このように、果報としての神通力について説かれるなかで、肉体的身体ではない具体的部位に触れている。また、パーシャ註では、同様の例として凝念 dhāraṇā を述べる箇所では臍の輪、心臓の蓮華、頭中の光、鼻の頂、舌の先という部位をその心の作用を縛り付ける対象として明示している。

nābhicakre hṛdayapuṇḍarīke mūrdhni jyotiṣi nāsikāgre jihvāgra ity evam ādiṣu

deśeṣu bāhye vā viṣaye cittasya vṛttimātreṇa bandha iti dhāraṇā // YBh3-1

臍の輪、心臓の蓮華、頭蓋の光明、鼻の先、舌の先などの場所に対して、または外部の対象に対して心の作用のみによって縛りつけることが凝念である。

この註釈は凝念の対象を大きく二系統に分類している。最初は、肉体的身体において直接見受けられない不可視なる部位である。臍の輪、心臓の蓮華、頭蓋の光明といった対象は、肉体的身体に求めることはできない。これらが不可視な微細身あるいは内化・神聖化した身体に求められなければ理解できない。

もう一つの対象は鼻や舌の先といった可視なる肉体の部位である。

そこで、重要な課題は臍の輪などの実践的な作法に関する身体的な部位、あるいはすべての身体観がサーンキヤの主張する微細身と等しいのか、或いはどういう関係にあるのかということである。

それに対しては残念ながら、Yogasūtra からは明確な回答はない。しかし、先にも述べたように、ヨーガ行法は時代を経てタントラの中に取り入れられ、身体的な思想と行法を大いに発展させてゆくこととなる。ここで見たYogasūtra の身体論でも不可視な身体を想定し、肉体的身体を媒体としながらも、一方で数々の作法で肉体的身体ではない不可視な身体と交渉を持っていると考えられる。

Yoga-Sūtra の身体論は、そこに綿密な実践作法を組み入れることで、独自にサーンキヤの解釈を発展させ、より充実した実践的身体論を創造していったのではないだろうか。そして、このような実践的身体論はまた、師資相承を行う上での重要な課題となっていたものとも考えられる。

結語

今回は身体的実践作法の奥行きを可視的肉体的身体と不可視な微細身の多元的な身体構成から見てきた。ヨーガの実践をしてゆく中心的な媒体となる身体が如何に捉えられていたかを知ることは、その実践の意味を知る手がかりとなる。ところで、本文中でも記したように、Yoga-Sūtra 自体にはそのことを明確に捉える資料が極めて少ないのも事実であって、総てにおいて十分検討できたとは言いがたい。しかし、この身体論が、サーンキヤのそれを基礎としていながらも、そこには、確実に実践派独自の身体的解釈が見え隠れしている。

また、神通力に関する問題や脈管や不可視な身体的部位等については、ハタヨーガの思想を参考にして、更に掘り下げて検討する必要がある。そういう意味においては、今回の論文は古典ヨーガ体系に、「汚れ→浄化→内化・深化→微細化・神聖化」という身体の把握過程と実践派独自の身体感覚を持っていたという報告にとどまり、以下の様々な問題に対しては、以降の課題としたい。

尚、本稿を作成するに当たって、東洋大学教授菅沼晃先生には貴重な時間を割いて指導していただいた。心から感謝の意を表したい。

【註釈】

1. yogaścitta-vṛtti-nirodhaḥ // YS1-2 「ヨーガとは心作用を止滅することである。」

2. sattvapuruṣānyatāpratyayo vivekakhyātiḥ / Ybh2-26 「弁別智とはサットヴァとプルシヤとが別物であるとする想念である。」
3. Mircea Eliade: Yoga, Bollingen Series / Princeton third Printing 1973 p. 227
4. 特にタントリズムにおいては、神聖さを具現する媒体として、完全な状態に浄化された「神的身体」が求められる。実践作法を為す上で特に身体の堅固さは極めて重要なのである。
5. TV3-1において前五支が外支であるのに対して後三支は内支であると説く。(—vibhūti-sāghanatayā pañcabhyaś ca yogāṅgebhyo bahiraṅgabhyo 'syāṅgatrayasyāntaraṅga-tayā—)
6. このことは、八支のそれぞれの支分の果報を見ると理解できる。特に、調気法によって意が凝念に耐えることが可能になるとというのが最も特徴的である。(dhāraṇāsu ca yogyatā manaḥ // YS2-53)
7. tatra śaucaṃ mṛjījalādijanitaṃ medhyābhyavaharaṇādi ca bāhyam / ābhyantaram cittaamal-ānāmākṣālanam / Ybh2-32 「その場合に外的な清浄とは水等によって浄化することと、清浄なる供物を食べることによって生ずる。内的[な清浄]とは心の不浄を洗い流すことである。」
8. 拙稿『ヨーガ行法における「坐法」(āsana) について』東洋大学大学院紀要 第31集を参照。
9. sthirasukham āsanam // YS2-46 「坐法は堅固で且つ心地好いものである。」
10. prayatnaśaithilyāntasamāpattibhyām // YS2-47 「[身心の] 力みを弛緩させ、無限なるものへ合一することによって[堅固で且つ心地好い坐法が完成する]。ここで、坐法の完成に「緊張の弛緩(形態的安定)」と「合一」という二種類の手段を説くこととなる。そして、註釈家によっては、最終的には坐法の完成は形態的な努力によって成就するものではないとしている。拙稿『ヨーガ行法における「坐法」(āsana) について』参照。
11. 調気法の場合単なる呼吸法とは区別するのが当然であるが、Yoga-Sūtraの記述からは明確には判断が付きにくい。註釈書に眼を通してみても、その傾向が見受けられ、肉体的身体の実践作法として説かれる場合が多いが、その中でも、様々な形態の実践作法の存在や、生氣との関連を示している部分もあり、そこからは実践作法に奥行きが感じられる。拙稿『ヨーガーストラにおける生氣-prāṇaについて』東洋大学大学院紀要第32集 参照。
12. 『木村泰賢全集』第二巻 p.153他 昭和59年12月18日 第六版 大法輪閣。
13. na khalvetadadyakṣagocarāḥ / TV4-10と身体、心、輪廻を述べる箇所説いている。
14. tapo dvaṃdvashanam / dvaṃdvaś ca jighatsāpipāse śītoṣṇe sthānāsane kṣāthamaunākāramaune ca / vrātāni caisam yathayogaṃ kṛcchracāndrāyaṇasāṃtapanādīni / Ybh2-32 「苦行は対立した状態(環境)に耐えることである。対立した状態とは、飢えと渇き、寒さと暑さ、立つことと坐ること、木片沈黙と表情の沈黙などである。」
15. ヨーガーストラでは30種類以上の綜制に由来する神通力を説くが、そのおびただしい神通の解説を見る限りでは、その有益性が目立つのである。しかし、実際は神通に対して警告しているのである。神通は決して至高、最上なるものではなく、それらによって、必ずしも解脱に結びつくものでもない。もっとも、神通の中でも高位のものは智の概念に近いものもあるが、それでも最終的には離欲しなければならない。ここでの、苦行の本務は、不浄を破壊してヨーガを妨害する障りを排除することである。次の偈がヨーガを呪術獲得の手段と誤解しないように説いている。
te prātibhādayaḥ samāhitacittasyotpadyamānā upasargāstaddarsana-pratyanīkatvāt / vyutthitacittasyotpadyamānāḥ siddhayaḥ // YS3-37
これら(諸々の神通力)は、三昧の状態にあるときには障害であり、(心が)発起した状態にあるときには神通力となる。
16. janmauśadhimantratapaḥsamādhijāḥ siddhayaḥ // YS4-1 「諸々の神通力は、素性や薬草、真言、苦行、三昧等によって生ずる。」と説かれるように単に神通力といっても原因となるものは様々である。それと同時に、数ある神通力の中には、解脱へと導く能力のあるものもある。一般的な神通力の解釈が心が乱れた場合に起こるというのに対して、極めて対照的である。YS3-49 (viśoka-siddhi) 他参照。
17. Georg Feuerstein : Encyclopedic Dictionary of Yoga, UNWIN HYMAN LIMITED, 1990によると臍の輪 nābhi-cakra はハタヨーガの maṇipūra-cakra と同義語で、精神エネルギーの中核と説明している。タントラ的な解釈を古典ヨーガに押しつけるのは大いに無理があるが、綜制の対象としての身体の

66
(267)

理解の参考にはなるであろう。

〈主に使用したテキスト〉

Pātañjalayogasūtrāṇi / Ānāndāśrama No. 47, 1984

〈文献略号表〉

YS :Yogasūtra / Patañjali

YBh :Yogabhāṣya / Vyāsa

TV :Tattvavaiśārādī / Vācaspatimiśra

〈1996年10月29日 上尾市・自宅にて〉